



子ども家庭支援を行う園のスタッフが有する「地域」観

メタデータ	<p>言語: ja</p> <p>出版者: 大阪公立大学大学院 現代システム科学研究科 現代システム科学専攻 社会福祉学分野</p> <p>公開日: 2024-02-15</p> <p>キーワード (Ja): 保育園の管理職, コミュニティ, 地域住民, 社会資源</p> <p>キーワード (En): community, local residents, management staff of child-care facility, social resources</p> <p>作成者: 吉田, 直哉, 中谷, 奈津子, 木曾, 陽子, 鶴, 宏史, 関川, 芳孝</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<p>https://doi.org/10.24729/0002000367</p>

子ども家庭支援を行う園のスタッフが有する「地域」観

吉田 直哉¹⁾ 中谷 奈津子²⁾ 木曾 陽子¹⁾ 鶴 宏史³⁾ 関川 芳孝¹⁾

1) 大阪公立大学大学院現代システム科学研究科

2) 神戸大学

3) 武庫川女子大学

要 旨

本論文は、地域に開かれた子育て支援が求められる中で、生活困難を抱える家庭を含む子どもと家庭への支援を積極的に実施している保育施設の管理職がもつ「地域」観を明らかにするものである。積極的に生活困難家庭への支援を行っている大阪府内の保育施設において、半構造化面接法を用いたグループインタビューを行った。その結果、園の管理職より、①「問題を抱えたエリア」、②「顔見知り・近隣住民」、③「園が開かれる先」、④「社会資源が所在するエリア」、という4つの「地域」観が示された。子どもと家庭への支援における「地域」は、問題を生じさせる場であると同時に、その問題を解決する資源を有する場でもあるというように、両義的な意味づけを与えられていることが明らかとなった。

キーワード：保育園の管理職、コミュニティ、地域住民、社会資源

はじめに：問題関心と対象・方法

本稿は、生活困難を抱える家庭を含む子ども家庭支援の際、重視される保育施設の管理職（理事長・園長（施設長）・副園長など）がもつ「地域」観を明らかにすることを目的とするものである。その目的を達するため、積極的に生活困難家庭への支援を行っている大阪府下の保育施設において、半構造化面接法を用いたグループインタビューを行った。施設の決定にあたっては、あらかじめ大阪府社会福祉協議会に依頼して、過去に生活困難家庭への支援を継続的に行った実績があり、積極的に支援を実施していると思われる施設を選定してもらい、その中から選択した。そのうち、調査協力の承諾が得られた施設を調査対象とした。本来、本調査は、組織的な情報共有や役割分担、介入の判断とそのプロセス等を含む内容を明らかにすることを目的として実施されたものである（中谷ほか 2022a, 2022b）。調査協力者として、理事長、園長（施設長）または主幹保育教諭（主任保育士）、及び困難事例に最も密接にかかわった保育者等に同席を求めた。本稿が分析の対象とするのは、特に園長（施設長）および副園長、理事長（以下、管理職）の語りである。

インタビューにおいては、①組織内における家庭支援の情報提供の在り方、②役割の分担に関する質問を投げかけた（具体的な語りを引き出すため、特定の支援事例1件を取り上げて語ってもらった）。分析対象である調査の実施期間は、2020年3月～2021年4月である。

本稿では第一著者である吉田が聞き取り調査を実施した3園（以下、A～C園。各園の概要は後述）の管理職3名のデータについて分析を行うものとする（インフォーマントのプロフィールは後述）。なお、A園のみ、

2回目となる追加のインタビューが実施されている（2回目のインタビューでは、生活困難家庭に育つ子どもの育ちへの支援の具体的内容（養護に関する支援、発達に関する支援、直接的に子どもを対象としない間接的支援の方法）についての質問がなされた）。なお、本稿で検討するのは、A園における2回目のインタビューである。

A園は、1981年に設立された社会福祉法人立の幼保連携型認定こども園である。調査協力者は、理事長（40歳代・男性）であった。理事長の保育経験年数は21～30年であった。

B園は、2005年に設立された社会福祉法人立の幼保連携型認定こども園である。調査協力者は、園長（60代以上・男性）であった。園長の保育経験はなし、園長歴は11～20年であった。

C園は、2009年に設立された社会福祉法人立の幼保連携型認定こども園である。調査協力者は園長（40代・男性）、副園長（40代・女性）であった。園長の保育経験年数は5～10年、園長歴は11～20年であった。

調査実施に先立って、依頼文、研究計画書を園宛てに送付し、研究の趣旨、目的、個人情報の扱い等について周知した。これらの事項については調査開始直前にも再度口頭で説明し、研究協力に関する同意を得た。音声データの録音及び保管について調査協力者に説明し、承諾を得た上でICレコーダーを用いて録音している。また本調査の実施に際しては、日本保育学会倫理綱領を遵守し、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会において承認を得ている。

冒頭で述べたように、本稿は、園内における子ども家庭支援に関する保育管理職の抱く「地域」観を明らかにすることを目的とするものである。よって、「地域」観の構造について明らかにするために、質的データ分析法を参考に分析した（具体的には、解釈的アプローチを採用した）。分析の手順は、まず、ICレコーダーを用いて録音された音声データに基づいて、正確な逐語録を作成した。次に、逐語録を反復的に読解し、保護者支援・子育て支援のポリシーに関する語りを抽出した。さらに、その語りの内容を、解釈的に検討し、その概念的記述を試みた。

1. 既存の子育て支援論・家庭支援論における地域の位置づけ

インタビューの結果の分析を示すに先立って、本節においては、保育所等における子育て支援（保護者支援）に関する先行研究における「地域」の位置づけを明らかにしておきたい。ただ、久木元が指摘しているように、地域の様々な保育資源や主体を取りこんだ子育て支援の展開に社会的な注目が集まる中で、想定される「地域」の内実が、論者によって大きく相違していることには注意しておくべきであろう（久木元 2016：10）。

そもそも、「地域」は一体・同質の総体としては捉えきれず、いわばシステムとして、多様な下位システムを組み込んでいる。前述の久木元は、子育て支援に限らず、保育サービス需給に影響を与える地域の背景として、①交通インフラ、産業構造、地域構造などの「経済・産業」、②家族構成、住民階層、ジェンダー規範、コミュニティ組織などの「社会・文化」、③財政、政党、運動主体などの「政治」という三要素を挙げている（久木元 2016：18f.）。「地域」は、このような諸次元にわたる構成要素からなる複層的なシステムとして捉えられる。

先行研究における地域観は、価値的にポジティブな性格をもつ認識と、ネガティブな性格をもつ認識の両極の間を揺れ動いている。

鶴は、1980年、2003年に保護者を対象にして実施された育児に関する調査報告、いわゆる「大阪レポート」「兵庫レポート」に言及しながら、「近所に母親の話し相手がないこと」を育児不安の要因として挙げ、これを「子育て家庭の孤立化」だとしている。これは「地域」からの孤立化を意味していよう（鶴 2009：5f.）。ここで示されているのは、「子育て家庭」を取り巻きながらも、それとの繋がりを有しない地域というネガティ

ブな像である。

子育て家庭を孤立させている「地域」という像とは別に、子育て能力を低減させている地域という認識も提示されている。例えば、加藤らによって「地域社会の子育て力の低下」（加藤ほか編著 2015：100）が指摘される時、その含意は、かつての地域は子育ての場であると同時に、養育の機能を有してもいたということであろう。地域の養育機能の低下という主張は、地域住民相互の絆（ボンド）、あるいは連帯の弱化と重ねて論じられる傾向がある。例えば、「近隣地域とのつながりが弱まり、人間関係が乏しくなっている」（加藤ほか編著 2015：216）というレトリックである。山縣文治も、「家庭を支えていた地域の子育て力が低下してきた」ことが地域子育て支援が要請される理由であると述べたうえで、「地域社会の崩壊」、つまり地域社会の「機能的意味、お付き合いという意味の、地域・コミュニティの危うさが指摘されている」とする（山縣 2016）。中谷らも同様に、地域のつながりが「希薄化」したと述べているが、その「希薄化」が具体的に何を意味しているのか、そして、そもそも従来「希薄」であり続けてきたかもしれない可能性については論じていない。なお、中谷らは、「地域のつながりの希薄化」が、子育て当事者の親によって実感され始めた時期を1980年代後半だとしている（中谷編 2013：21）。注意しておきたいのは、このような地域住民相互の絆の弱化という主張については、ほとんど具体的な論拠が示されることはなく、各論者の印象論として、地域の空洞化、脆弱化が語られる傾向があるということである。さらに言えば、そこで言及される「地域」が、都市部、その郊外、農村部などの地理的特性を捨象した、抽象的なコミュニティとして記述されていることも見過ごせない。

「地域のつながりの希薄化」が、地域の「子育て力」の低下を招いたという認識は、加藤らと中谷らの双方に共有される認識である。中谷らは、「地域のつながりの希薄化」が、地域の「子育て力」の低下を帰結させたという認識が登場し、それが1990年代末の時点で「すでに疑いようもない明確な社会問題」として認識されていたとする（中谷編 2013：166）。

地域のボンドの弱化に伴う地域の「子育て力」の低下は、「社会問題」として位置づけられ、その趨勢は食い止められなければならないものとして認識されている。地域の「子育て力」を回復させることは、「地域のつながり」を再興させることと直結させられている。例えば、「地域の子育て力の回復」という課題意識が、子育てネットワークの当事者から語られている（中谷編 2013：81）。「回復」させるべきものとして地域のつながりがあるという認識は、かつて存在していた力が喪失したという認識を前提としているであろう。中谷らは、2001年以降の動向として、「地域の子育てインフラ」として、子育てネットワークが位置づけられるようになったと述べている（中谷編 2013：29）。

喪失された地域という認識からの帰結として、子育て支援を介して、地域は、新たに構築されるものだという認識も提示されている。例えば、社会資本を活用することで、新たなコミュニティとして、子育てネットワークという形で「醸成」されるものだという認識がそれである（加藤ほか編著 2015：219）。

小口らも、保育所の実践する保護者支援が、地域のネットワークに対する積極的な関与を含むものとしている。小口らは、保育所における保護者支援において、「地域への働きかけ」という機能が発揮される場合があるとし、Bronfenbrennerの発達システム論を引用しながら、家族・保育所等をマイクロシステムとして位置づけている。マイクロシステムを取り巻くメゾシステムは、「マイクロシステムに直接影響を与える施設機関」とされ、そこに「近隣との関係」が含まれる。小口らが求めているのは、マイクロシステムとしての保育所から、メゾシステムとしての地域へ対してなされる積極的な関与であり、それによるメゾシステムとしての地域の活性化である（小口ほか編著 2019：98）。

絆・つながりとしての地域という認識とは区別される「地域」観として、保育所が連携し得る専門機関が存在するエリアとしての地域というものがある。例えば、保育カウンセリングを通じた支援を行う際、特に虐待

等が疑われる場合において、地域は、地域子育てセンター、児童相談所、要保護児童対策地域協議会等の、連携すべき専門機関が所在するエリアとして位置づけられている（藤後ほか編著 2022：28）。このような「地域」観に立つとき、専門機関の所在地と保育所との距離感によって、「地域」の範囲は膨縮するだろう。

保育所の連携の対象としての地域という位置づけは、小口らにも見られるが、連携の対象は専門機関に留まらず、地域住民を含むものとして位置づけられている（小口ほか編著 2019：140）。ここでは、「保育士が連携・協働する機関や組織、人々」のうち、「近隣、友人」「ボランティア」「民生委員、児童委員」が、家族と共に地域の構成員として位置づけられている。このような「地域」観は、「民間のサポートネットワークとしての地域」ともいうべきものであろう。血縁に対するものとしての「地縁」が強調されるものとして、「血縁によらない地域の支えあい」としてのファミリー・サポートセンター事業が挙げられる（加藤ほか編著 2015：82）。

以上のような「地域」観は、いずれも「地域資源」、あるいは「社会資源としての地域」としての地域観といえよう（『最新保育士養成講座』総括編纂委員会編 2019：125）。なお、「地域資源」は、二つに区分されることがある。例えば、児童相談所、病院、保健所などの「専門的資源」のほか、「当事者や住民による活動」のほか、「近隣の人々や親戚等」も、家族にとっての「人的資源」と位置づけられる。前者を公的サービス、後者を人的サポートとして区別しつつ、これらを「活用」しうる資源として位置づけるのである。前者をフォーマルな資源、後者をインフォーマルな資源と区別する場合もみられる（加藤ほか編著 2015：110）。

社会資源としての地域住民に留まらず、社会を自ら再構成していく主体としての住民の潜在力に着目した認識が、子育て主体としての地域というものであろう。「子育ての主体」としての地域住民とは、同時に、生活における多様なコーディネート、「地域の雰囲気」の醸成、地域の再構成の主体としての地域住民でもあるとされる（中谷編 2013：167）。

そのことと表裏一体の問題意識として、地域こそが、子育ての孤立化を緩和しうるポテンシャルを有しているとする認識も生じてくるであろう。「子育てネットワーク」は、単に子どもや親に居場所を与えるだけではなく、「地域を編成していく主体の形成」を実現する場であるという認識もみられるようになった（中谷編 2013：32）。中谷らに見られる、主体化される住民としての地域という認識は、福祉供給主体の多元化の中で、新たな供給源としての「地域住民を中心としたボランタリーな主体」への注目がなされていることと関連していよう（久木元 2016：17）。

本節において見てきたように、保育所における子育て支援論における「地域」に関する言及は、「地域」に対する現状認識として、その機能を喪失しつつあるとするネガティブな見解がある一方、「地域」を多様な社会資源を有する空間的な広がりとして捉えたり、将来へ向けた展望として、居住する住民が主体性を発揮しつつ新たなネットワークを構築して復興させつつある新規のコミュニティとして捉えるポジティブな見解の双方が混淆している。

2. インタビューにおいて語られた地域観の諸類型

前節において瞥見したように、本調査において抽出された「地域」も、ポジティブな意味で捉えられる「地域」観と、ネガティブな意味で捉えられる「地域」観というように分類をすることが可能だろう。以下においては、本調査における語りに表れた四つの「地域」観について検討する。

①「問題を抱えたエリア」としての地域

A理事長 X市という土地柄、いろんな生活困窮の方がやはりほかの地域と比べて多いんですけども、特にコロナの影響で、不安定になっている、収入が減ってきた、保護者の方の方が安定しなくなってきた。イライラが募ったり、心の病が出たり、そういった傾向がこの1年間ございました。

上掲のA理事長の語りには、園が所在する市町村を、特に貧困をめぐる問題が多く発生するエリアと捉える認識が示されている。コロナ禍に脆弱な労働環境に置かれている保護者が集住しているエリアとして、園の所在地を位置づけている。

B園長 うん、[子どもは園で] 我を通したね。よそではしてもらっていないから、甘えるところが初めてできたのちがうかなという……。ただ、一方では、もう家ではたたかれまくっていたんちがうかな。それと、「おまえ、はよせい」とか、「ボケ」とか、この地域独特の言葉で。そういう言葉掛けしかされていなかった。

B園長からは、きつめの方言が離されるエリアとして地域を捉える認識が示されている。きつめの方言が、親から子どもに対して日常的に使用されることが、子どもに対する高圧的な態度となり、それが園における子どもの態度にも影響を与えるものと捉えられている。

②「顔見知り・近隣住民」としての地域

A理事長 進級式の時、入園式の時、全員職員並べて、まず「みんなの先生は、前に並んでいる人、全員です」というところから、「困ったことがあったら、誰にでもいいから前に立っている先生に声をかけてね」って保護者に対してでもアピールしていますし、それがいわゆる社会かなど。社会でも、困っていることがあれば、コミュニティで、地域で、隣でも向かいでも、部落の人でも誰でも、ということだったと思うんですが、その小さな社会、コミュニティを園の中に再現しようと思うと、全園児担任というのが一つの私の[目指すべき保育の形] …。

A理事長 お向かいさんはがつつり付き合いがあるけれども、困っていたら、裏側の人も助けてくれたりだとか。そういうところで「支え合い」ということだと思うので、そういったところをこの園の中で再現するというのが、地域としてコミュニティをつくるうえで大事な観点かなど。

A理事長からは、「困ったこと」があれば、手助けをしてくれる近隣住民との繋がり、支援的なコミュニティとしての地域という認識が示されている。相互支援的なコミュニティを、園内の子ども同士、保育者と保護者との関係性の中で「再現」することが目指されているという。園は、いわば再構成された地域コミュニティであるべきだと考えられているのである。

B園長 で、ももちゃんのおばあちゃんは、Xさんのところの長女ということが分かって……。Xさんといいのですが、ここは〇〇校区なんですけれども、隣の校区の自治会長さんなんです。区民祭りの事務局

の会長さん。その他この辺のことをいろいろお世話されている方。[インタビュアーに対して] 資料としてお渡ししたんですけども、この園の社会的貢献というところ、そこに分園をつくる時のことを書いたんですけども、Xさんのことは書かずに、こちらのY自治会長さんがこの地域の自治会さんのところに行ってくれてということがあったんですが、その橋渡しというか連絡先を全部決めてくださったのがXさんで、全部できた後にここのZさんが地区の会長さんのところと一緒に行ってくださった。本当にここでも世話になった方なんです。Xさんの会社に行ったときにお孫さんがいて、そのお孫さんが△△小学校。制服で分かったんです。「おっ、△△小に行ってるの?」というようなことで。女の子だったのでその子の服のお下がりももらっている。これも分かりました。あれだけぐうたらして、家もぐちゃぐちゃなのに、家主さんもよう怒らないとか、何回もけんかしてももったのも、肉屋さんに働きだしたのも、結局、XさんかXさんのおばあちゃんか、この辺の筋の応援があったのちがうかなということで……。後で分かったんですが、Xさんのお葬式のために、私も許されて家に行って台所でお手伝いしていたんです。そういうことでした。

B園長からは、生活困難家庭の子どもの祖母が、園が隣接する小学校区の自治会長の娘だということを、ふとしたきっかけから園長が知った経緯が語られている。思わぬ知り合いとの縁を感じさせる場としての地域という認識が示されているといえる。

③ 「園が開かれる先」としての地域

B園長 まず、母親がここ[B園]に[来た]……。園庭開放といって週に1回か2回ある一般地域の開放、「にこにこおひさま広場」[仮名] といっているんですけども、施設を開放して、ただ遊んでもらって園児と交流するということの部分で、ひょこっと訪ねてきた。

そのときに職員が「このおかあちゃん変やで」ということで気がついて、一報をまず入れてくれた。見ても何をするにしても無気力。やる気がない。育児能力がない。返事もろくすっぽしない。「何か変や、変や」というので、「それだったら、ともかくもう一回呼び掛けてみて。電話を掛けてみ」ということで掛けて、何回か掛けたうちの1回くらい来て、ということがあった。

B園長によって示されているのは、「園庭開放」によって園が開かれる先としての地域という認識である。園庭開放にやってきた保護者の姿から、子育て上の困難を感じ取り、園から保護者へのコンタクトを試みた経緯が語られている。

B園長 [園の側から保護者に対して] 声掛けするのと、ともかく「園庭開放においで」ということで世の中に引っ張り出さないといけないということで[様々な呼びかけを行った]。

B園長によれば、「園庭開放」を利用する保護者にとっては、家庭の領域の外部にある「世の中」との接点になっている。逆に言えば、家庭領域は外部としての「世の中」から隔絶した閉鎖的な場として認識されている。

④「社会資源が所在するエリア」としての地域

C副園長 民生委員でもないようなボランティアをX市はつくってくださっていて、私たちも含め団員はX市内にたくさんいらっしゃるんですが、ちょっと気になる子がいたら、そこへ電話へしてみるというのもひとつ……。一歩が出やすい環境があるのかなと思いますね。

C副園長 でも、小学校に見に行ってくださいたり、ここら辺でもやっている民間の子ども食堂に顔を出しに行ってくださいたりね。

C副園長の語りにおいては、市が主導するボランティア活動員がいるエリアという認識が示されている。同時に「子ども食堂」という民間の支援サービスが展開されている場としての「地域」観が示されている。公的アクターとは異なった「民間」のリソースが複数存在している場として地域が位置づけられている。

C園長 何の縁もゆかりもないおじさん、おばさんがふらっと来て「お子さん、どう？」とか言われたら、「何やねん、帰ってくれ」ってね。だから、例えば知っている担任の先生にたまたま道で会って、「お母さん」って話し掛けられるのとは大きく違いますよね。やっていることがすごくハードル高いと思うんですよ。

C園長が示しているのは、顔見知りでない疎遠な近隣住民が居住するエリアとしての地域という認識である。その疎遠さは、母親にとっては、そこに参画していくことへの抵抗感を抱かせる原因となっている。園の職員との距離感の近さと対比したときに、地域との距離感の大きさが、保護者にとって実感されてくるという。それに対して、保育者は、母親に対して話しかけやすい心理的な近さにいる存在だというのである。

3. まとめ・語られなかった地域観

以上のように本調査においては、園の管理職より、①「問題を抱えたエリア」、②「顔見知り・近隣住民」、③「園が開かれる先」、④「社会資源が所在するエリア」、という4つの「地域」観が示された。子ども家庭支援に関与する園の管理職が抱く「地域」観は、問題を生じさせる場であると同時に、その問題を解決する資源を有する場でもあるというように、両義的・複合的な意味づけを与えられていることが明らかとなった。

本稿の冒頭において見たように、先行研究においては、保育所における子育て支援における「地域」に関して、①「地域」に対する現状認識として、その機能を喪失しつつあるとするネガティブな見解、②「地域」を多様な社会資源を有する空間的な広がりとして捉えたり、将来へ向けた展望として、居住する住民が主体性を発揮しつつ新たなネットワークを構築して復興しつつある新規のコミュニティとして捉えるポジティブな見解の双方が示されてきた。先行研究において見出される両義的な「地域」への意味づけは、今回の園の管理職による具体的な語りにおいても見出されたといえる。

以下においては、本調査における語りにおいては明示的には「語られなかった」地域観を4点にわたって指摘し、今後の研究において明らかにするべき課題として提示しておこう。

第一に、保育者自身が居住するエリアとしての地域という認識は語られることがなかった。保育者の通勤圏内の広狭にも左右されるかもしれないが、「地域住民としての保育者」が語られなかった背景として、地域の子育て支援機能と保育所の子育て支援機能の差異化を図ろうとする意識があったかもしれない。保育者自身の

居住エリアと、園の所在エリアとの主観的距離感のあり方については、別立てで検討する必要がありそうである。

第二に、「自然環境としての地域」についての語りは見られなかった。今回の対象とした3園がいずれも、大都市の郊外の住宅地に位置することから、自然環境を地域特色としてとりわけ強調はしなかったということかもしれない。各園において保育内容に取り入れている「自然」の位置づけによって、地域における「自然」に対する認識に影響が及ぶ可能性がある。

第三に、地域住民に関してのネガティブな認識も語られることはなかった。典型的には、保育所建設反対訴訟を提起する地域住民グループのように、保育所を自らの生活とは直接関係のないものとして認識し、多元化する園の業務に対する理解を欠く「抵抗勢力としての地域」である。実際に、「クレーマー」的住民が存在していたとしても、それを取り分けて問題視していないがゆえに、地域住民へのネガティブな認識が高まることが避けられている可能性がある。

第四に、子どもを見守るまなざしとしての地域も語られることはなかった。このことは、子どもを見守って欲しいとは思わないという園側の認識を示しているというより、地域による見守りはあるに越したことはないが、それに過度に期待したり、依存したりするつもりはないというように、園による子育ての見守り機能の独自性を認識しているからであろう。このことは、地域共同体が、確固たるものとして存続してきたし、今後も持続していこうという楽観的な見通しに、各園が必ずしも立っていないことを示唆している可能性がある。

本稿において検討してきたように、地域に対する認識、すなわち「知識」観は、園によっても、スタッフによっても多様な形で形成され維持される。「地域」観の特質として注目すべき点は、「地域」観は、単に地域の現状に対する認識であると同時に、子育て支援実践を方向づけていく価値的認識・規範的認識でもあり、それが子育て支援実践の理念としても機能しているという点であろう。

「地域子育て支援」という語は、1995年ごろから見られ（日本保育協会「保育所地域子育て支援活動に関する調査研究報告書」1995年）、既にその実践的蓄積もなされ、社会的意義に対する認知も拡大してきた。平成改元以降、保育所等は、子育て支援の場、あるいは資源として、積極的な活用が一貫して求められてきた歴史を有する。地域と、保育所における地域子育て支援が直結して認識されるようになって、四半世紀以上を経過した現在においてこそ、「子育て支援」における「地域」観について、理論的・実践的の両側面から、現在までに蓄積された知見の整理を試みる必要があるだろう。

附記

本稿の一部は、日本保育学会第76回大会（2023年5月、オンライン開催）において発表されている（吉田直哉・中谷奈津子・木曾陽子「子ども家庭支援を行う園のリーダーが有する「地域」観」）。なお、本稿は、JSPS科研費基盤研究B（19H01651）の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- 小川清美・土谷みち子（2007）『「あたりまえ」が難しい時代の子育て支援：地域の再生をめざして』フレーベル館
- 小木曾宏・橋本達昌編著（2020）『地域子ども家庭支援の新たなかたち：児童家庭支援センターが、繋ぎ、紡ぎ、創る地域養育システム』生活書院
- 小野崎佳代・石田幸美編著（2020）『保護者支援・子育て支援』（Minerva保育士等キャリアアップ研修テキスト）

ト6)、ミネルヴァ書房

- 柏木壺峰編著（2020）『子ども家庭福祉における地域包括的・継続的支援の可能性：社会福祉のニーズと実践からの示唆』福村出版
- 加藤邦子・牧野カツコ・井原成男・榊原洋一・浜口順子編著（2015）『子どもと地域と社会をつなぐ家庭支援論』福村出版
- 北野幸子（2021）『地域発・実践現場から考えるこれからの保育：質の維持・向上を目指して』わかば社
- 久木元美琴（2016）『保育・子育て支援の地理学：福祉サービス需給の「地域差」に着目して』明石書店
- 郷地二三子（2004）『少子化地域における子育て支援』新読書社
- 小口将典・得津愼子・土田美世子編著（2019）『子どもと家庭を支える保育：ソーシャルワークの視点から』ミネルヴァ書房
- 『最新保育士養成講座』総括編纂委員会編（2019）『子ども家庭支援：家庭支援と子育て支援』全国社会福祉協議会
- 佐藤純子編集代表（2017）『拡がる地域子育て支援』（子ども・子育て支援シリーズ第2巻）、ぎょうせい
- 鶴宏史（2009）『保育ソーシャルワーク論：社会福祉専門職としてのアイデンティティ』あいり出版
- 藤後悦子・柳瀬洋美・野田敦史・及川留美編著（2022）『社会的子育ての実現：人とつながり社会をつなぐ、保育カウンセリングと保育ソーシャルワーク』ナカニシヤ出版
- 中谷奈津子編（2013）『住民主体の地域子育て支援：全国調査にみる「子育てネットワーク」』明石書店
- 中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝編著（2018）『保育所・認定こども園における生活課題を抱える保護者への支援：大阪府地域貢献支援員（スマイルサポーター）制度を題材に』大阪公立大学共同出版会
- 永野典詞・伊藤美佳子・北野幸子・小口将典責任編集（2018）『保育ソーシャルワークの内容と方法』（保育ソーシャルワーク学研究叢書第2巻）、晃洋書房
- バウマン（2017）『コミュニティ：安全と自由の戦場』奥井智之訳、筑摩書房
- 橋本真紀（2015）『地域を基盤とした子育て支援の専門的機能』ミネルヴァ書房
- 増山均（2009）『子育て支援のフィロソフィア：家庭を地域にひらく子育て・親育て』自治体研究社
- 松田博雄・山本真実・熊井利廣編（2003）『三鷹市の子ども家庭支援ネットワーク：地域における子育て支援の取り組み』ミネルヴァ書房
- 無藤隆・安藤智子編（2008）『子育て支援の心理学：家庭・園・地域で育てる』有斐閣
- 矢萩恭子編集（2018）『保護者支援・子育て支援』（保育士等キャリアアップ研修テキスト6）、中央法規出版
- 山岡テイ（2007）『地域コミュニティと育児支援のあり方：家族・保育・教育現場の実証研究』ミネルヴァ書房
- 山縣文治（2016）「地域子育て支援における保育のあり方と保育技術」日本保育学会編『保育学講座⑤：保育を支えるネットワーク：連携と支援』東京大学出版会

The “community” view held by preschool staff providing child and family support

Naoya Yoshida¹⁾, Natsuko Nakatani²⁾, Yoko Kiso¹⁾, Hirofumi Tsuru³⁾, Yoshitaka Sekikawa¹⁾

1) Osaka Metropolitan University

2) Kobe University

3) Mukogawa Women's University

Abstract

This paper clarifies the view of “community” held by the management staff of child-care facilities who actively provide support to children and families, including families with living difficulties, amid the demands for child-care support that is open to the community. Semi-structured group interviews were conducted at child-care facilities in the Osaka Prefecture that actively provide support to families with difficulties in their daily lives. During these, the facilities’ managers indicated four views of “community”: (1) areas with problems, (2) acquaintances and neighbors, (3) a place where the facilities are open to all, and (4) an area where social resources are located. It became clear that community, in the context of providing support for children and families, has many ambivalent meanings; it is a place where problems arise, but at the same time, it is a place with the resources to solve those problems.

Key words: community, local residents, management staff of child-care facility, social resources